

ヨハネによる福音書14章1-14節 「父の御許に行ってから」

1A 父の家にある住まい 1-4

2A イエスへの信頼 5-14

1B 父への道 5-7

2B 父と一つであるイエス 8-11

3B 祈りによるイエスの御業 12-14

本文

ヨハネによる福音書 14 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、13 章まで来ました。14 章を二つに分けて、一節ずつ学んでみたいと思います、今朝は 1 節から 14 節まで見ます。

1A 父の家にある住まい 1-4

今朝、見ていくところは、初めのイエス様の言葉によって分かります。「1 あなたがたは心を騒がせてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。」であります。心をどのようにして治めていけばわからない、というのが、今のコロナ時代の大きな課題になっています。しかし、同時に、この時期ほど聖書がこれほど私たちに身近になったことはないのではないのでしょうか？心を騒がせてはならない、神を信じ、わたしを信じなさい、です。

イエス様はこれを、11 人の弟子たちに語っておられました。最後の晩餐、過越の食事を 12 人の弟子と共に取っていた時、イスカリオテのユダがその場からいなくなり、イエス様は、真に神に選ばれた弟子たちに語りたいことを、心を込めて語り始められました。わたしが愛したように、互いに愛し合いなさい、ということ。それから、これから「13:33 わたしが行くところに、あなたがたは来ることができません。」であります。

ただでさえ、何か暗雲が立ち込めていた時です。イエス様を殺すことをすでにユダヤ人の指導者たちは決めていました。それに加えて、今、イエス様が、あなたがたから去ると言われているのです。彼らは、何が起きているのか訳がわかりませんでした。これからエルサレムで主が、神の国を立てられると思っていたのですから。ところがここからいなくなると言われるので、ペテロは、「あなたのためなら、いのちも捨てます。」と言ったのです。ところが、「13:38 鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしを知らないと言います。」と答えられました。

その中で、これから先、全く何が起るかわからない状況になりました。それが、彼らの心を騒がせていたのです。私たちにとても身近な問題ではないのでしょうか？

1 「あなたがたは心を騒がせてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。」

心が騒ぐとき、必要なのは信頼です。深い信頼です。イエス様は、神を信じなさいと言われました。先々分からない状況の中で、神は王座に着いておられます。神が支配しておられます。すべてを動かしておられます。神の御手の中にあります。

そしてここで大事なのは、「またわたしを信じなさい」ということです。イエス様はこれから、ご自身がいかにか父なる神の子であることを示していかがれます。イエス様を信じるということは、父を信じることであり、神に信頼するということは、イエス様を信頼するということであり、父と子は一体であることを示していかがれます。

日本の方々はその大半は何らかのかたちで神を信じていますね。漠然とですが、世界は人間だけの世界ではないことは、うすうす分かっています。人間ではない、神がおられるからこそ、今の世界があることを薄々、知っています。しかし、それだけでは荒波のような世で、心の平安を持っていることは不十分です。聖書の神は、父と子の関係の中で、明確にご自身を示しておられます。その関係が私たち人間にも広げられているということです。その中で、信頼して、憩うことができるから、それで真の平安を得ることができます。

2 わたしの父の家には住む所がたくさんあります。そうでなかったら、あなたがたのために場所を用意しに行く、と言ったでしょうか。3 わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。4 わたしがどこに行くのか、その道をあなたがたは知っています。」

ペテロが、「どこにおいでになるのですか。」と尋ねていたので、主が父のみもとに行くのだとお答えになっています。そして、その時に父の家に、あなたがたのための場所も用意しに行くと言われています。当時、新しくお嫁さんをもったら、その父の家に増築をして、部屋を増やして一つの家に住むようになります。それと同じように、教会の花婿であられるキリストが、花嫁であるキリストを父の家に迎えるために、その場所を用意しているよ、と言われているのです。

ここで私たちは、騒いでしまう心に将来の希望、天における希望が必要であることが分かりますね。パウロは何度となく、今の苦しみを将来の栄光と比べました。「ロマ 8:18 今の時の苦難は、やがて私たちに啓示される栄光に比べれば、取るに足りない」と私は考えます。」取るに足りない、と言っています。そして、「Ⅱコリ 4:17-18 私たちの一時の軽い苦難は、それとは比べものにならないほど重い永遠の栄光を、私たちにもたすのです。私たちは見えるものではなく、見えないものに目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に続くからです。」パウロの苦しみは、尋常ではないことをみなさんもお存じだと思います。飢え、むち打ち、偽兄弟、船の遭難、そして教会で問題がって、それへの気遣いなどがあります。しかし、それらのことが取るに足りない、また一時の軽い苦難とみなすことのできるほど、後に来る栄光は非常に重いということが分かります。私たちが心を平安に保つことができるのは、父のところに住まいがあるという希望です。

「父の住まい」とは何でしょうか？ここで強調されているのは物理的な住まいよりも、父なる神と共に住むという交わりのことです。イエス様は、ご自身のことについて、「6:35 奴隷はいつまでも家にいるわけではありませんが、息子はいつまでもいます。」と言われました。「1:18 父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。」ともあります。父のそばにいる、父と共にいるという状態です。それは、天であるし、また終わりの日の天のエルサレムのことであるでしょう。それが、天というものの本質です。神がおられるところ、神が王座に着いているところです。

そして、ここでの「住まい」は、もしかしたら復活の体のことを指しているのかもしれませんが。主ご自身が、ご自分の体のことを神殿に喩えて、「2:19 この神殿を壊してみなさい。わたしは、三日でそれをよみがえらせる。」と言われました。そして、パウロは今の体を天幕に喩え、上から与えられる新しい体を、神の住まいとしました。「Ⅱコリ 5:1-2 たとえ私たちの地上の住まいである幕屋が壊れても、私たちには天に、神が下さる建物、人の手によらない永遠の住まいがあることを、私たちは知っています。私たちはこの幕屋にあってうめき、天から与えられる住まいを着たいと切望しています。」

イエス様は、今は神の右の座に、天において着いておられます。けれども、ここでイエス様が約束されているように、「また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。」のです。これが、携挙の出来事です。主が、ご自分の者たちを迎えに、再び来てくださいます。テサロニケ第一 4 章にかいてあります。「Ⅰテサ 4:16-17 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラツパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。」コリント第一 15 章にもあります。「15:51-53 聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな眠るわけではありませんが、みな変えられます。終わりのラツパとともに、たちまち、一瞬のうちに変えられます。ラツパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。この朽ちるべきものが、朽ちないものを必ず着ることになり、この死ぬべきものが、死なないものを必ず着ることになるからです。」

そして、イエス様はその目的を語っておられます。「わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。」弟子たちがイエス様から離れてしまうこと、このことを主は気遣っておられます。いつまでもそうなのではない、再びあなたがたは、わたしのいるところにいることになるのだと慰めているのです。

2A イエスへの信頼 5-14

そして4節で、「わたしがどこに行くのか、その道をあなたがたは知っています。」と言われていすね。それに対して、「いや、分かりません」と弟子は尋ねます。

1B 父への道 5-7

5 トマスはイエスに言った。「主よ、どこへ行かれるのか、私たちには分かりません。どうしたら、その道を知ることができるでしょうか。」6 イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。

トマスらしい言葉です、彼はしばしば、疑い深いトマスという呼び名で知られていますね。有名なのは、主がよみがえられた時に、その場になかったために、打たれた釘の跡、刺された腹の跡を見なければ信じないと言った人です。けれども、トマスがただ疑い深いというだけでは、その評価は物足りないと思います。彼は正直な人です。今さら聞けない質問も正直に聞く人ですね。今、ここでだれも、まだどこに行くのか分からないと他の弟子たちも思っているところで、彼はそのまま、尋ねました。

イエス様の答えは、単純明快です。主がなぜ、「その道をあなたがたは知っています」と言われたのか？ イエス様ご自身を弟子たちは既に知っていました。物理的にどこに行くのか知らなくとも、イエスご自身を知っているのであれば、それこそが道なのだということです。例えば、山道に迷ったとしましょう。そこで近くの村の住民であるおじいさんに出会います。その迷った人にとって、おじいさんこそが頼るべき存在です。この人こそが、自分を正しいところに導く案内人です。正しい道という時に、主ご自身と共にいることこそが鍵であり、そこでイエス様は「わたしが道です」と言われました。この方によって、初めて父のところに行くことができるからです。

イエス様はこれまで、「わたしは、ある」という言葉をもって、ご自身がモーセにかつて現れた主なる神と一体であることを示されました。5 章 43 節、「わたしは、わたしの父の名によって来た」とあります。6 章 35 節、「わたしがいのちのパンです。」8 章 12 節、「わたしは世の光です。」と言われました。そして、8 章 24 節、「わたしが「わたしはある」であることを信じなければ、あなたがたは、自分の罪の中で死ぬことになるからです。」、8 章 58 節、「アブラハムが生まれる前から、「わたしはある」なのです。」そして、10 章 7 節、「わたしは、羊たちの門です。」そして、11 章 25 節、「わたしはよみがえりです、いのちです。」そして、ここ 14 章にて、「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。」と宣言されています。

道について、イエス様は、マタイの福音書で「7:13-14 狭い門から入りなさい。…いのちに至る門はなんと狭く、その道もなんと細いことでしょう。」と言われました。これは、単に、他の宗教では救われなくて、キリスト教だけが救われるというような排他的なことではありません。そうではなく、この方であって、初めて聖なる神、正しい神の姿が分かり、どんなに自分が正しいと思っている者でも、この方の前では罪と汚れが明らかにされ、人はただ、十字架の贖いにある神の憐れみにすがることによってのみ救われる、ということです。なので、イエス様が道です。

そして、真理についてですが、イエス様が総督ピラトの前で、「わたしは、真理について証しする

ために生まれ」たと言われた時に、「真理とは何か。」と尋ねました(19:37-38)。尋ねたというよりも、「真理なんていうものは、哲学者らが語っているが、そんなに分かるのかね？」という意味合いだったのだと思います。いろいろな人が、これこそが真理だと主張していますが、「I コリ 1:20 知恵ある者はどこにいるのですか。学者はどこにいるのですか。この世の論客はどこにいるのですか。神は、この世の知恵を愚かなものにされたではありませんか。」とあり、世の知恵で真理を知ることができないのです。しかし、イエスこそが神の本質の完全な現われであり、この方が真理なのです。

そして、いのちです。使徒ヨハネは、「1:4 この方にはいのちがあった。」から言い始めて、この福音書で数多くのところで、この方にいのちのことばがあり、いのちがあることが証されています。それは、肉体のいのちだけではなく、それ以上に霊のいのちであり、永遠のいのちです。あの金持ちの青年は、イエス様が子供たちを受け入れている姿を見て、「ルカ 18:18 良い先生。何をしたら、私は永遠のいのちを受け継ぐことができるでしょうか。」と尋ねました。イエス様に、この世のものではない命、永遠の命があると察知したのです。

そして、「わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。」と語っておられます。このことは、何度となく使徒たちが語り継いだことです。使徒ペテロは、「使 4:12 この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人間に与えられていないからです。」イエス様は、すべての名にまさる名が与えられ、この方にこそ救いがあるということ。これが、私たちの宣べ伝えている福音です。多くの人は、イエスが道の一つであるかもしれないと思って、受け入れてくれます。けれども、イエスにしか救いがないことを知ると、排他的だということを受け入れなくなるのでは、実はないのです。自分の罪深さを本当に知らなければ受け入れられない代物であることを悟るのです。それで受け入れられません。

7 あなたがたがわたしを知っているなら、わたしの父をも知るようになります。今から父を知るので。いや、すでにあなたがたは父を見たのです。」

イエス様は、再び、あなたがたはすでに父を知っているのだ。なぜなら、わたしをすでに知っているから、と言われていきます。今から知る、と言い直しておられるのは、よみがえった暁には、確かに神の御子であることが明らかになるので、知るようになるでしょう、ということです。

2B 父と一つであるイエス 8-11

そして大胆なことを語られます、「いや、すでにあなたがたは父を見たのです。」ですから、他の弟子、ピリポが尋ねるのです。

8 ピリポはイエスに言った。「主よ、私たちに父を見せてください。そうすれば満足します。」9 イエスは彼に言われた。「ピリポ、こんなに長い間、あなたがたと一緒にいるのに、わたしを知らないの

ですか。わたしを見た人は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください』と言うのですか。

ピリポは、イエス様が大きな天からの徴などを見せることによって、父を見せてくださいと尋ねたのですが、イエス様は大胆にも、「わたしを見た人は、父を見たのです。」と言われました。そう、イエス様は神であられるのに、肉体を取られた方です、父なる神のふところにおられたのに、神に遣わされて人々の間に住まわれた方です。「ヘブ 1:3 御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現われであり・・・」。

イエス様が彼らに残された数多くのわざ、またその生き方、この方に、父がおられることを証しておられました。三年半ぐらいのこと、そのことを示し続けていかれました。私たちも同じです。私たちが、何か大きな出来事の中に父なる神がおられると思っていますが、身近に起こっていることにイエス様がおられ、そこに神が現れてくださっているのです。

そして、数多くの人が、神についていろいろ誤った捉え方をしています。神がなんでこんなことをするのか？と、災害を見る時に悩みます。また聖書を読んで、旧約聖書で多くの人を殺している神を見て、恐ろしい神、酷い神だと思えます。けれども、はたしてそう思っている自分が、正しく読んでいるのか、正しく見ているのか？という疑いを持たないといけませんね。イエス様にこそ、神の完全な形で表れています。イエス様であって、神が説き明かされています。

10 わたしが父のうちにおいて、父がわたしのうちにおられることを、信じていないのですか。わたしがあなたがたに言うことばは、自分から話しているものではありません。わたしのうちにおられる父が、ご自分のわざを行っておられるのです。11 わたしが父のうちにおいて、父がわたしのうちにおられると、わたしが言うのを信じなさい。信じられないのなら、わざのゆえに信じなさい。

ここまではっきりと、ご自身が天地創造の神と一体であることを証しされました。そして、これを信じなさいと命じておられます。けれども、弟子たちでさえ、うろたえてしまうかもしれません。そのことをご存知なので、「信じられないのなら、わざのゆえに信じなさい。」と言われます。わざを見れば、そこにこの方が神から来たことが自ずと分かります。疑いようのない証言となっています。

3B 祈りによるイエスの御業 12-14

そしてイエス様が弟子たちに伝えたかったことを、伝えられます。父と子にあるこの交わり、一体の中に彼らを導き入れるということです。

12 まことに、まことに、あなたがたに言います。わたしを信じる者は、わたしが行うわざを行い、さらに大きなわざを行います。わたしが父のもとに行くからです。

ものすごい約束です。イエス様と同じわざを行い、さらに、イエス様以上の大きなわざを行うと言われるのです！使徒の働きを見れば、それが分かります。マルコの福音書の最後を読むと、「16:20 主は彼らとともに働き、みことばを、それに伴うしをもつて、確かなものとされた。」とあります。使徒の働きと言っていますが、正確には「使徒たちを通しての、主の働き」としたほうがよいでしょう。主が共におられて彼らによって働かれました。病人や癒されました、悪霊が追い出されました、死人がよみがえりました。御言葉が語られました。そして、イエス様以上の大きなわざというのは、イエス様が肉体の中に置かれていたので、その働きに制限が与えられていましたが、今や、聖霊によって、主は、使徒たちすべてに働くことができるようになりました。また異邦人への宣教もそうでしょう。主は、ユダヤ人以外の人たちにはごく一部の人たちだけに伝えられましたが、全面的に異邦人への門が開かれたのです。

13 またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは、何でもそれをしてあげます。父が子によって栄光をお受けになるためです。14 あなたがたが、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしがそれをしてあげます。

イエス様は父のわざを行われる時に、例えばラザロをよみがえらせるとき、こう言われています。「11:41 父よ、わたしの願いを聞いてくださったことを感謝します。」主は、よみがえらせるわざを行われる前に、このように父に願っておられたのです。この父と子の間にある関係を、イエス様の名によって引き延ばしてくださる約束なのです。父は子を愛して、すべてのことをお任せになりました。子も父の言われることを、ことごとく行われました。その一体の関係にあっては、イエス様の願われることはすべて、父の願いと一致しています。

私たちが御心を求めているならば、自分に与えられている願いは、神ご自身の願いになっています。心が一つになっているからです。「Ⅱ歴代 16:9a 【主】はその御目をもって全地を隅々まで見渡し、その心のご自分と全く一つになっている人々に御力を現してくださるのです。」何でも、というところを勘違いして、宝くじに当たりますように、という類のものも聞いてくださると思う人たちがいます。いいえ、15 節に、「もしわたしを愛しているなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。」とあるのです。子が父を愛して、その言われたことを行われたように、イエス様を愛して、その言われることを守る中で、何でも求めることを父がしてくださる、ということです。

イエス様は徐々に、私たちをご自分の聖なる所へと招き入れてくださっています。ご自分の栄光、その本質の中に、父なる神とご自身の関係の中に導き入れ、そこにある弟子たちの恵みについて語られています。